郷土史への扉

西郷隆盛と霧島 その8

「西南の役」と敷根火薬製造所

今年は国内最後の内戦「西南の役」が終結し、西郷隆盛が没して一四〇年の節目の年です。

今回は、国分敷根にあった「敷根火薬製造所」と西南の役の関わりについて紹介します。

※跡地は私有地のため立ち入りはできません。

敷根火薬製造所建設の背景

文久二（一八六二）年八月、島津久光一行が起こした[※1]生麦事件が発端となって、翌年七月に薩英戦争が起きました。この戦争で鹿児島城下の大半が消失し、島津斉彬が建設を進めた鹿児島市磯地区の工場群も壊滅的打撃を受け、薩摩藩の人々は西洋の科学技術の脅威を身をもって体験しました。

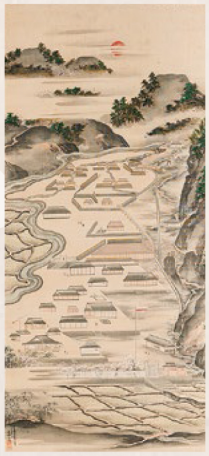
一方、英国艦隊の損害も大きく、互いに相手の力を認め合った両者は、以後急速に接近することになり、薩摩藩は英国から多くの新技術を学びました。

そのような中、新たな火薬製造所を建設しようとしていた薩摩藩は、英国式の技術を取り入れました。敷根火薬製造所の記録に「舎密の技を使った」とありますが、これは「化学的な製造を行った」と読み取ることができます。

薩摩藩は、戦国時代から火薬を独自に作っていました。その技法は中国式を模倣したもので、品質はあまり良くなかったようです。それが、英国に学んだ最新の製法により、火薬の品質が向上し、より大きな爆発力を得たのだと思われます。

敷根火薬製造所の概要

文久三（一八六三）年、薩摩藩は鹿児島市磯地区の集成館の裏山にあった藩の工場に加え、敷根の東端の傾斜地に敷根火薬製造所を造りました。敷根に造られた理由は次の通りです。



敷根火薬製造所絵図（提供：鹿児島市維新ふるさと館）

①軍事施設を分散させるため。
②敷根を流れる高橋川の水量が豊富である（水車を回せる）。
③湾奥で敵船が容易に入れない。
④海に近く運搬に便利である。
⑤正面の山が突き出しており、施設の全容を隠しやすい。
⑥集落から離れている（爆発対策）。

工場は高橋川から三系統の水路を引いて、八ヶ所に水車を置き、火薬の原料（木炭・硫黄・硝石）の粉砕が行われました。最盛期には一二〇人ほどが働き、年間二四トンほどの火薬を製造していたと記録されています。この工場は当時、質・量において日本はもちろん、東洋一だったといわれています。

西南の役との関わり

敷根火薬製造所は、明治四（一八七一）年の廃藩置県によって、薩摩藩から明治政府の管轄となりました。

明治十（一八七七）年二月に西南の役が勃発すると、西郷軍への弾薬補給を阻止するため、三月十日に敷根沖に達した政府軍の軍艦「春日」の指揮官・伊東祐麿らによって焼き払われ、わずか十五年の操業となりました。

工場で働いていた技術者たちは、その後、東京に建設された[※2]海軍工廠の火薬工場で、また一部は化学関係の会社で指導者として働き、近代日本の化学技術の発展に尽くしました。

現在、火薬製造所跡は農地となっていますが、近年の発掘調査によって、その痕跡が良好な状態で残っていることが判明しました。

敷根火薬製造所は、わずかな期間の操業ながら、日本の近代史に大きな足跡を残した貴重な遺産です。霧島市の宝として後世に残したいものです。

（文責＝鈴）

※1　島津久光の行列に騎馬で乱入したイギリス人を薩摩藩士が殺傷した事件。
※2　海軍直営の軍需工場。